地質ニュース519号，10頁，1997年11月
Chishitsu News no.519, p.10, November, 1997

—巻頭エッセイ—

晩秋随想

有田正史[1)]

昔から，アンコールワットとインカの遺跡は私の心を引き付けて離さない．あれだけの技術を持った文明がなぜ滅びたのか，またその技術がなぜ子孫に継承されなかったのか私には未だに解けぬ謎である．これらの遺跡に寝転がって空を見上げたら何かわかるのではないかと長い間考えてきた．

先日，上野にアンコールワット展を見に行き，そして失望して帰ってきた．その展示会場には砂岩で作られた石像や浮き彫りが展示されていた．それらのものからアンコールワットについての若干の知識を習得することはできたが，アンコールワットが持つ荘厳さとか偉大さを感じることができなかった．展示物はアンコールワットを構成するほんの一部の部品であって，アンコールワットそのものではなかったからであろう．もっとも私の期待があまりにも大きすぎたことも失望の一因であろう．アンコールワットを理解したければそこに行かなければならないということであろう．

国宝展で仏像が展示されたりするが，それに美術品としての見事さは感じるが，仏としての有難味は本来あるべきところ，お寺で拝観しなければ感じないのではないだろうか．お寺で仏像をみると，それが国宝級でなくてもなにか感じさせるものがあるのは，それが仏像の本来のあるべき姿だからであろう．

地質学においても同じことが言えるのではないだろうか．現在は化石にしても鉱物にしても商品価値を持っていて購入することが可能である．しかしながら，高価で珍しい化石をいくら買い求めてもそれらから地球の生命の誕生と絶滅の壮大なロマンを感じることは少ないのではないかと思う．また，地質関連の博物館が最近ふえているが，そこで展示物を見ても同じであろう．

野外調査で化石を発見し，掘り出した時，また，地層ごとにその形態や群集の構成が変化することに気がついたとき人は地球の歴史の神秘に感動するのである．そして，なぜかと疑問を持ったときに新しい研究が始まるのであろう．ライエルの地質学原論はこのようにして生まれたのであろう．

8月，高校生を連れて第三紀の地層の観察と化石採取に行ったが，化石を手にして喜々としていた彼等の顔が忘れられない．彼等の数人は将来地質屋になりたいといっていた．彼等が感激した理由は高校で教えない分野に触れ，新鮮だったことにも一因があると思えるが，野外で地層や化石に触れることが地質学の本来の姿だからだと思う．彼等の輝いた目を見ながら彼等が大学に進学したとき，そこに地質学は存続しているのだろうかと不安になった．

ある地質コンサルタントの社長さんの書いた小説を読んだ．内容の大半は離婚して陶芸家を目指した美人さんに陶芸家になるには粘土鉱物の知識が必要だとしてなされた若い地質屋の講義録で占められている．講義の内容は地質図，活断層にも及び地質学をまったく知らない彼女が見事な理解を示し，すばらしい生徒だと先生は感激し，最後には結婚するのである．

この小説に，我々は面白く役立つことをやっているのだから社会も理解するべきだとする現代の地質屋の典型を見ることができる．これは地質屋の押し付け的片思いではないのであろうか．私にはかかる講義で地質への理解を普及できるとは到底思われない．現代の地質屋が社会から理解されないと気付いたとき，社会の無知を誹り，わが身の不遇を嘆けば済むのであろうか．このようなことになるとすれば，それは地質学の本質である野外地質を放棄したからであろう．地質屋は今こそ原点に立ち返るべきであり，老若男女を地層の前に誘う活動を始めるべきではないか，このままではアンコールワットと同じで継承者がいなくなるのではないかと木々が葉を落とし晩秋の気配が増していく中で愚考している．

1) 地質調査所 統括研究調査官